

■ 「ミニマル・ミュージック」風の音楽 (万華鏡的音楽) - 制作のてびき

0. スティーブ・ライヒの曲、この授業の過去の参考曲などをよく聞いて、作ろうとしている音楽のイメージをつかむ。
1. 配布した素材映像の読み込み
2. 「D ドリアン・スケール」をつかう
 - レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド、レ (レ音から開始される白鍵のみを使用する音階)
 - S、D、 F、G、H、J、K、L (バーチャル鍵盤 [+K] での使用キー)
 - 右手で S,D,F,G キーを、左手で H,J,K,L キーを、それぞれ押す手の構えをつくる。
 - バーチャル鍵盤で上記キーを全て押して和音を鳴らし、このスケールの雰囲気をつかむ。
 - 両手で上記キーを「バラバラ」に押して発音させ、曲の仕上がりイメージをつかむ。
3. 音色を慎重にえらぶ。
 - 「D ドリアン・スケール」の雰囲気を、その後さらに膨らませやすい音色をえらぶ。
 - ただし、発音の立ち上がりが早い音をえらぶ (例えば木琴のような音)。
4. 第1パートの作曲
 - 響きの雰囲気を感じながら、2小節程度の短いフレーズ断片を作る。
 - バーチャル鍵盤を用いて、リアルタイム録音をする。
 - 「録音」メニュー > 「カウントイン」を「2小節」にすると録音しやすい。
 - 【重要な指定】 第1パートのみフレーズの最初2音は、必ず「レ→ラ」か「ラ→レ」とする。
 - レ音 = S キー、ラ音 = H キーで発音される。
 - 一つのパートで完結する完成度の高いメロディーではなく、リズムの面白さをもった旋律の断片素材をつくる。
 - 入力したら、必ず 16 分音符単位で「クオンタイズ」をかける (「1/16 - 音符」のクオンタイズ)。
5. 映像の長さにあわせて、フレーズをループさせる。
 - 第1パートのリージョンを、コピー&ドラッグ (オプション+ドラッグ) で敷き詰める。
6. 第2パートの作曲 (第1パートと同じ音色)
 - 例えば5小節目から開始する。2小節程度の短いフレーズをつくる。要クオンタイズ。
 - 【コツ】 第1パートをよく聞いてから作ること。鼻歌で歌えるほどに把握するとよい。
 - 第1パートよりも少し高い音域でつくる。
 - 第1パートと絡み合うようなフレーズを心がける (インドネシアの音楽「ガムラン」を参照)。
 - 第2パートを作ったら、リージョンを曲全体に敷き詰める。
7. 第3パートの作曲 (第1パートと同じ音色)
 - 例えば9小節目から開始する。2小節~4小節程度の短いフレーズ断片をつくる。要クオンタイズ。
 - 第3パートを作ったら、リージョンを曲全体に敷き詰める。
8. 第4パートの作曲 (第1パートと同じ音色)
 - 例えば13小節目から開始する。2小節~4小節程度の短いフレーズ断片をつくる。要クオンタイズ
 - 第4パートを作ったら、リージョンを曲全体に敷き詰める。
9. 4つのパートにおいて、曲全体に敷き詰められたリージョンを、部分的に削除する方法で、曲全体の構成を考える。
10. 適宜、装飾的パートを不可する (音色を重ねる、作ったフレーズの断片をずらして重ねる、など)
11. 完成したら、音楽のみの「オーディオファイル」と、「映像つき音楽」として、2種類で書き出す。

■ 提出作品（minimal）の評価のポイント

・仕事の丁寧さ

- データ作りの丁寧さ（例：音データに不用意なタイミングのズレがないこと、など）
- 音楽や音素材の美しさへの意識が強いもの（例：何度も聞き直しながら作られたもの、など）
- 映像とのリンクへの最低限の意識がみられること（例：両者の長さを合わせる、など）

・〈自然さ〉と〈意外さ〉のバランスをもった音楽性

- 旋律・和声・リズムなどの音楽の流れにおいて、〈自然さ〉と〈意外さ〉のバランスがあること
- 自然さ = 統一感、 意外さ = 変化 とも言い換えられます。

・音楽全体を通じて「こだわり」が感じられるもの

- 逆に述べると「どうしたらよいかわからない」等の姿勢とともに現れる〈混沌〉や〈適当〉がないこと。

「どうしたらよいかわからない」等をさけるために、最低限守ること4つ

1. リアルタイム入力では、「クオンタイズ」をかけること。発音タイミングの無意味なズレを避けること。
2. 〈統一感〉を得るために、各パート内では「旋律の反復」を用いること（同一リージョンを並べること）。
3. 第一パートをよく聞くこと。例えば鼻歌で歌える程に、フレーズのリズムと旋律の特徴を理解すること。
4. 「Dドリアン・スケール」（レ音から上のレ音までの白鍵）をつかうこと。黒鍵をつかわないこと。

※ 作曲とは音の組織化です。「集団授業で初学者の美大生が短期間で音楽をつくる」試みを実現させるには、私はやむおえず上記の条件が最低限必要と考えました。一方、もし上記からあえて逸脱して作るならば、その人を「独自の音の組織化」に挑戦した人ととらえます。私はそこまで求めていませんが。それはとても困難な作曲になりますが、その際は、自ら挑戦したわけですから、決して「どうしたらよいかわからない」とは言わないでください。また個人対応のときには、「どのように音を組織化（秩序化）」したか教えてください。興味があります。